

■クライマックスフェイズ

●クライマックス 1：美味しいモノには裏がある

◆解説 1

CFC に乗り込むシーン。《不可触》を使った状況を想定しているが、プレイヤーの提案した内容に合わせ描写は適宜変更すること。

▼描写 1

正面玄関から堂々と CFC アーコロジー内に入り込んだ君たちは、入口ですれ違いざまに警備員からそっと ID カードを手渡され、数々のセキュリティをスルーして第七研究棟にたどり着いた。N◎VA にある 7 つのアーコロジーの一角、大企業 CFC が君たちを「見て見ぬふり」をしている。誰も君たちに触れない、触れない。《不可触》（アンタッチャブル）。

◆解説 2

第七研究棟内部を突破するシーン。リエが《突然変異》を残していない場合、何らかの神業を使わない限り強引な突破を余儀なくされ、全員が軽減不可能な山札 1 枚分の肉体戦ダメージ（装甲無視）を受ける。このダメージは次の戦闘のカット進行開始直後に適用される。また、リエが死亡している場合、このダメージは山札 2 枚分に変更される。

▼描写 2

第七研究棟内は独立稼働型のガード・ドローンで厳重警戒されていた。十重二十重に君たちの行く手を塞ぐドローンに対し、リエは提案を行う（連れてきていない場合、こっそりついてくる）。

▼セリフ：リエ

「要は、アレを全部壊せばいいのだろう？」
「少し時間がかかるから、お前たちは先に行ってくれ」
「細かい話はわからないが、この先にきつとろくでもないやつがいる。そういうのは気配でわかる」
「また、怒りに身を任せて、お前たちに迷惑をかけたくはない。さっきの借りも返したい」
「それに、ここはお前たちの世界だ。お前たちのルールで裁くのが一番いいと思う」
「後は任せた。どんな結果になっても構わない。決着をつけてくれ」
※リエの《突然変異》が残っていないば使用を宣言。《脳神》（未使用なら《不可知》など適当な神業）の効果として使用し、敵をかく乱する。
リエはガード・ドローンの群れに突撃する。獣のごとき咆哮と破碎音を背に、君たちは奥へと進んだ。

◆解説 3

羽釜達と対決するシーン。羽釜からの話がひと段落するとカオナシ、蜘蛛蜘蛛が姿を現す。すみれがさらわれている場合、彼女はテーブルについて必死の勢いで食事をしている。既に正気を失っておりまともな会話は成立しない（精神ダメージ[精神崩壊]を受けている）。

▼描写 3

奥へと進んだ君たちは、巨大なラボルームへとたどり着いた。巨大な円筒形の容器から伸びた無数のパイプが壁・床・天井へつながっており、周囲には大小様々なモニタが情報を更新し続けている。
部屋の中央には場違いなテーブルセットがおかれており、そこには作ったばかりと思いき洋風のディナーが並べられている。そこから流れてくる香りは、今まで食べたどんな食事・・・培養食品（キャンディ）のみならず、天然食材（スキヤキ）をも凌駕する、異常なほど食欲を誘うものだった。それは、この緊張した状況で、明らかに異様とも感じられた。
当惑する君たちの前に、白衣を着た温和な顔立ちの男性が姿を現した。年齢は 40 代後半、といったところだろうか。

▼セリフ：羽釜

「ようこそ、ディナーパーティへ。ちょうど出来上がったところだ。席にかけてくれたまえ」
「僕は、すべての人に美味しい料理を食べてほしい。そう考えている」
「そのためなら、僕の命を懸けてもおしくない」
「すべてはそのために行っている。君たちもその食事を食べれば、きっと僕の話がわかるようになるだろう」
※食事を食べた場合、理性の制御判定を行うこと。成功した場合、異常なまでのおいしさを異質と感じて即座に吐き出す。失敗した場合、その後ひたすら食べ続けてしまい、精神ダメージ 17：戦意喪失を受ける。このダメージは次のカット進行 1 カット目の終わりまで有効とする。
【崩落事故や料理の食材など、何かを聞いただした】
「悪いが、答えられない。常識に、倫理観に、規定概念に縛られた普通の人間はこの事実をそう簡単に受け止める事はできないだろう」
【《真実》を使った】 ※〈インタビュー〉など判定を伴う行為はカット進行中の処理とすること

「あくまで、真実に拘るのか。それもいいだろう」
「大方、推理できているのだろう？ 答え合わせと行こうか、名探偵」
「事の起こりは 2 か月前。僕はある実験をしたんだ」
「裕福な暮らしをしている人間が、極度の飢餓状態に転じたときの味覚変化。そのデータがほしくてね」
『空腹は最高のスパイス』と言うだろう？ その状態をモニタリングすることで、培養食品をより『おいしい』と感じさせる事が可能なサイコアプリを作ろうとしたんだ」
「そのために状況を作った。崩落事故を偽装し、通信妨害を行い、乗客の IANUS をハッキングしてモニタリングを続けた」
「実験の終盤。十分な飢餓状態を経過させた後で、故障を偽装した搬送用ドローン内から保存食を取り出した後。乗客にそれを配り始めたときにそれは起きた」
「僕から手渡されたそれを放り出し、すべての乗客が“彼女”に貪りついたのさ」
「笑ってしまった。笑うしかなかった。培養食品など足元にも及ばない究極ともいえる食材が、そんなところにあったとは」
「何より驚いたのは、“彼女”の生命力だ。“彼女”の遺体はラボに持ちこまれた後、蘇生した」
「そう、“彼女”こそ、我々人類を救済する、天が遣わした御使いだ！」
（巨大な円筒形の容器カバーが展開され、中が見えるようになる。手足の代わりに無数のパイプを翼のように広げた、リエとより二つの顔の少女が、培養液の中に浮かんでいる）
「彼女は求められるものを生み出す。要求に応じてどんな食材、どんな味の素材にでも肉体を変質させるのだ」
「彼女こそ R シリーズの中核！ R シリーズの R は『ルウ』の R だ！」
「これが君の知りたかった真実だ。満足してくれたかな？」
「これを公表しないと約束してくれる限り、僕に君たちと敵対する意思はない。矛を収めてくれないか」

【『③ニューロ』に】

「君のこただな。彼女の言っていた情報屋は」
「僕の偽装防壁を突破し、情報にたどり着いたその手腕は驚嘆に値する。素晴らしい才能だ」
「僕と来る気はないか？ 十分な報酬を用意しようじゃないか」

【何故生存者を殺したのか？】

「彼らはルウの“味”を知っているからね。R シリーズを口にするれば、きっと R シリーズの食材が何なのかわかってしまっただろう。かわいそうだが犠牲になってもらった」

【ルウは生きているのか？/ルウを解放しろ、など】

「この設備があればこそ彼女は生き続けている。外に出れば数分と持たないだろう」

【決別した】

「そうか。残念だ・・・蜘蛛蜘蛛、カオナシ。片付けろ」

▼セリフ：ルーク（＝カオナシ）

【『②カプト』に】

「よう、相棒。こんなことになって残念だ」
「事故の事を調べている奴がいる。それも蜘蛛蜘蛛とやり合えるレベルの奴らが」
「だから安全を確保するために、仕方なく CFC 側ですみれちゃんを保護しようとしたのさ」
「何事もなければ、俺はお前と一緒に 1 週間、仕事を続けて、それで終わりだったんだぜ」
「お前と一緒に仕事をするのは、楽しかった。本当に悪くなかったんだぜ、相棒」
「そうかよ。ま、どうせ俺はカオナシだからな。ぼちぼちカオナシに戻るぜ。あばよ、相棒」

▼セリフ：蜘蛛蜘蛛

【『④レッガー』に】

「また会えて嬉しいぜ」
「蜘蛛蜘蛛は一度決めた標的を必ず殺す。信条、ってやつさ」
「殺し続けて最強を証明するか、負けて俺が死ぬか。そのときが来るまで、俺は戦い続けるしかない」
「だから。お前を殺して、蜘蛛蜘蛛の最強を証明する一步にさせてもらう！」

▼セリフ：羽釜（死亡時）

「馬鹿な・・・何故、どうして理解しない」
「人類に与えられた、完璧な食材を。何故」
「だが、後は、“彼女”が・・・すべてを無駄には・・・」

▼セリフ：ルーク（＝カオナシ）（死亡時）

「もし、あのまま、ルークのまままでいられたら、俺は・・・」
「ありえない話、だよな。じゃあな、相棒」

▼セリフ：蜘蛛蜘蛛（死亡時）

「なあ、お前らは強いんだよな？誰にも負けたりしないよな？」
「蜘蛛蜘蛛に勝ったんだから、最強でいてくれよ・・・なあ・・・」

◆結末

羽釜・カオナシの双方が戦闘不能になった時点で館内アナウンスが流れる。蜘蛛蜘蛛は生き残っていれば「蜘蛛蜘蛛は金にならない仕事をしていない」と、戦闘を放棄して投降する。
「ケース HD 発生。第七研究棟はこれより完全に閉鎖されます。棟内にいるものは速やかに退去してください。繰り返します・・・」
ガード・ドローンはずべて大破しており、既にリエの姿はない。リエは《霧散》が残っているなら使用を宣言する（残っていない場合、血痕が残されている）。シーンを終了する。

ルウは培養層に捉われている。キャストがルウの生存を望む場合、基本的には培養層の外に出せる状態（《タイムリー》、《電脳神》など）にし、また死亡ダメージを打ち消すための神業（《黄泉還り》など）が必要になるとする。救出のための神業が丁度 2 つである場合、キャスト側にルウを救出する条件を提示したうえで、次の「クライマックス 2」の描写を先にに行い、「ルウを助けるか、《暴露》を打ち消すか」の 2 択を迫るようにすること。

（※そのため、「ルウの救出あるいは《暴露》打ち消し」のための神業の残りが 1 つである場合、蘇生のための神業は 1 つとしてもよい）

●クライマックス 2：クライムトリガー

◆解説

ミシェイラの《暴露》が使用される。効果発動前に剛三からキャストに連絡が入り、妨害しない場合は真相が公表される。（※妨害は《電脳神》を想定している。）なお、ミシェイラのリサーチを行っていない場合、《暴露》に対抗するキャストの神業に対して《ブリーズ！》を使用し妨害を行う。
※使うあての無い、《ブリーズ！》、を打ち消せる神業がキャスト側に余っているようであれば、条件を問わず《ブリーズ！》を使ってしまっても良いだろう。

▼セリフ：剛三

「おう、そっちはどうなってる？CFC とはカタついたか？」（※キャストが秘匿していた場合、すみれから聞いた、などとしてもよい）
「今しがた、おかしい話を小耳にはさんだんでよ。CFC の R シリーズとかいう新製品があったろお」
「今巷でえれえ人気なんだが、そいつの“材料”を一斉公開しようとしてるらしいのよ」
「何か妙な気配がしたんでな、一応伝えておくぜ」

▼セリフ：ミシェイラ

（『③ニューロ』に連絡が来る）
「やあ、情報屋。急な話で悪いが、1 つ頼みがある」
「今から行われる報道は、人類の未来に、夢に尽きてきた男から託された、大事なもののなんだ」
「彼の純粋な想いに、少しでも感じるところがあるのなら・・・お願いだ。彼の最後の望みを、かなえてやってくれないか？」
（ミシェイラのリサーチを行っていない場合は《ブリーズ！》を使用、《電脳神》を打ち消しとして使用させる）

◆結末

神業で《暴露》を妨害できない場合、CFC は批判的にさらされるが、すべての責任を羽釜に押しつけ沈静化を図る。一方、イラム族はヒルコハンター達によりすべて捕獲され“食用人種”として企業に引き渡され、ヒルコの人権を訴える活動は沈静化・逆に差別化運動が活発化し、人間との関係は悪化の一途を辿る。ヒルコ街周辺の他、ヤマタイをはじめとする各地で多くの悲劇が起こることになるだろう。また、エンディングでリエは人間の前から姿を消すことを告げ、いずこかへと去る。ルウが生き残っていた場合、すみれからルウが姿を消した事を伝えられる。